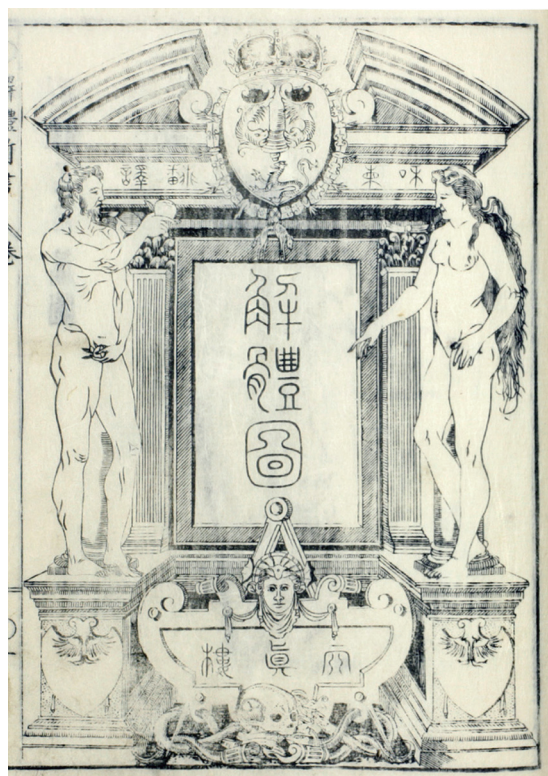
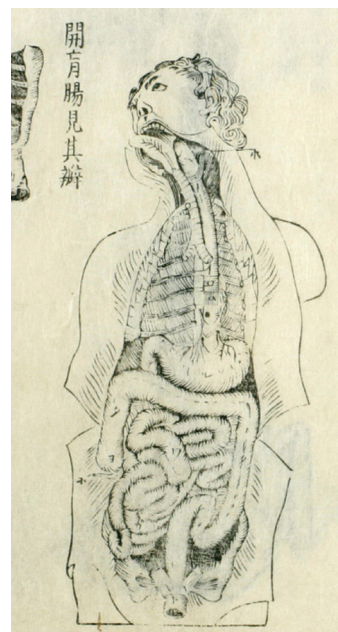


蘭学（解体新書）



* 小田家文書（山口市）53「解体新書」



解説

「解体新書」は日本で最初の西洋医学翻訳書で、山脇東洋の「蔵志」に影響された前野良沢、杉田玄白らの努力で、1774（安永3）年に刊行されました。ドイツ人クルムスの「解剖図譜」のオランダ語訳「ターヘル・アナトミア」を漢文訳したもので、神経・軟骨・動脈などの訳語を造り出しています。

「解体新書」は医学の発展に寄与したことはもちろんですが、オランダ語の理解が進み、鎖国下の日本において西洋の文物を理解する下地ができました。また江戸に私塾・芝蘭堂をひらいて多くの人材育成にあたった大槻玄沢などの人材が育つ契機ともなりました。左の「解体新書」は、江戸時代に吉敷毛利家の医師を務め、以後、代々医者として活動した小田家に伝来したものです。

宛シ因リテ亦圖志ヲ作り蔵志ノ遺漏ヲ補
説ス因リテ直ニ之ヲ師ニ報シ古來ノ從
ハカラザルヲ言フ
翌九年六月廿一日藩又一婦人ヲ裁減ノ南
郊大屋ニ斬刑スルコトアリ初ハ磔刑ニ決
セシガ孝庵未タ婦人ノ體内ヲ視ザルヲ以
テ其刑ヲ減シテ斬ニ處シ醫界ノ研究ニ資
センコトヲ請フ尤許アリ孝庵之ヲ解剖ス
ルコト前ノ如シ因リテ又之ヲ師ニ報シ解
剖ノ結果ヲ詳言ス爾後ニ書ハ後ニ録セリ

* 県史編纂所史料814「旧長門藩医員栗山孝庵并旧長門藩士中島治平履歴写」

「解体新書」の刊行に先立つこと15年、山脇東洋の高弟で萩藩主の侍医であった栗山孝庵は、1759（宝暦9）年に、萩市大屋で日本で初めての女性の腑分けを観臓しています。これはその関係資料です。